

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

生徒指導 第53号

—小,中,高,盲・聾・養護学校対象—

平成18年10月発行

「いきなり型」の問題行動の未然防止と対応

近年、少年非行の低年齢化や凶悪化が社会問題化しており、その背景には児童生徒の規範意識の低下等の問題が指摘されている。

このような中、ふだん学校でも特に目立った行動がなく、むしろまじめなタイプと見られていた児童生徒が突然引き起こす、いわゆる「いきなり型」の問題行動については、重大事件につながるケースも出てきている。

そこで、本稿では、学校が「いきなり型」の問題行動をどのようにして未然に防止し、対応していけばよいかについて述べる。

1 児童生徒の問題行動の特徴と課題

(1) 児童生徒の問題行動の特徴

近年発生している一連の重大事件を検証した、文部科学省の『新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム（中間まとめ）』（以下「中間まとめ」という。）から、児童生徒の問題行動の特徴について示す。

- ① 一見、生徒指導上の課題が見えにくく、真面目で口数が少なくおとなしい生徒が重大犯罪を行っていること
- ② これらの子どもは、例えば学校内の友人関係や家族関係に起因するストレスなど様々な形で

心にストレスを溜め込んでいるが、それぞれ周囲に何らかの前兆を見せていると思われること

- ③ これらの子どもは、自分の行為がもたらす影響の重大性への思慮が足りなかったと思われること、及び自分の中のストレスを溜め込まずに誰かに相談したり自分の気持ちを的確に表現できるようなコミュニケーション能力又は対人関係能力が必ずしも十分でないように見受けられること
- ④ 一部の事件においては、親子関係又は兄弟関係等の家庭内でのトラブルが加害生徒のストレスとなっていたと思われること
- ⑤ インターネット上の有害情報等子ども達を取り巻く社会環境の影響も考えられること

(2) 児童生徒の問題行動の課題

先の中間まとめの中では、児童生徒の重大な問題行動への対応策を検討する上での課題として、次のような点が挙げられている。

- ① 環境に適応しているようで実は不適応に人知れず悩んでいるケースもあるため、その場合の前兆行動を見逃さないように、個々の児童生徒をきめ細かく見ていく必要があること
- ② 個々の児童生徒の精神的なストレスを緩和できるような相談体制の整備の必要があること
- ③ 家庭での養育環境の改善と家庭教育の改善・充実の必要があること
- ④ 前兆行動の中でも特に凶器の収集、攻撃的・暴力的なゲームやビデオ、書物への著しいのり込みなどの行動を示している場合には注意の必要があること

(※ 下線部は筆者による)

2 「いきなり型」の問題行動の未然防止

問題行動の未然防止については、前述した課題への対応を中心とした具体的取組が必要である。そこで、問題行動の未然防止に向けた下記の取組例の中から、ここでは、特にア、イについて詳しく述べる。

- ア 日常の観察による児童生徒理解の深化と前兆行動の把握
- イ ストレスマネジメント教育の導入（指導資料教育相談：第107、112、120号参照）
- ウ 開発的カウンセリングの考え方・技法を活用した人間関係づくりの促進とコミュニケーション能力の育成（平成17年度研究紀要110号参照）
- エ 定期教育相談をはじめとする教育相談の充実（平成17年度研究紀要110号参照）
- オ 校内体制の確立
 - ・ 「いきなり型」の問題行動の前兆等に関する組織的な情報収集
- カ 家庭や地域、関係機関などとの連携
 - ・ 相談機関、医療機関、警察などとの連携

(1) 日常の観察による児童生徒理解の深化と前兆行動の把握

問題行動の未然防止については、教師や保護者のきめ細かな観察による日常的な状態の把握が必要である。そこで、次に文部科学省等の報告書を基に、児童生徒の観察のポイントを示す。

- ① 自信を失っている様子はないか。
- ② 学級への所属感が弱まっていないか。
- ③ ストレスを蓄積している様子はないか。
- ④ いじめられている様子はないか。
- ⑤ 学級で孤立している様子はないか。
- ⑥ 家庭環境等の大きな変化はないか。
- ⑦ 学習意欲等が急に低下していないか。
- ⑧ 不登校傾向は出ていないか。
- ⑨ 腹痛等の身体的症状を訴えていないか。
- ⑩ 無理に明るくふるまっている様子はないか。
- ⑪ 頑張り過ぎている様子はないか。
- ⑫ 自傷行為の痕跡はないか。
- ⑬ 刃物の携帯・収集・使用はないか。

(2) ストレスマネジメント教育の導入

「いきなり型」の問題行動は、不快な感情により自己コントロールを失った結果として現れる場合が多い。その未然防止には、ストレスマネジメント教育の導入が効果的であると考えられる。

そこで、このような問題行動の未然防止に向けたストレッサー（ストレスを与えるもの）への対処法（コーピング）に基づいた授業の展開例を挙げる。

次に示すのは、中学校第2学年における学級活動の展開例である。

「ストレスとその対処法について学ぼう」

過程	主な学習の流れ
導入 (5分)	(1) 本時の学習のねらいを理解させる。 ・ 学級のストレスに関するアンケートの結果を使って動機付けを行う。 (2) ストレッサーを弱めたり、取り除いたりすることはできないか考えさせる。 【例】「まわりが騒がしい時どうする？」 ⇒「静かにして」と言う。 【例】「友だちに嫌なことを言われた時どうする？」 ⇒ 気にせず立ち去る。 【例】「暑くてイライラする時どうする？」 ⇒ クーラーのスイッチを入れる。
(5分)	(3) 自分自身のストレッサーについて考えさせる。 ・ 家庭でのストレッサーは何か ・ 学校でのストレッサーは何か (家庭か学校いずれかに絞ってもよい)
(7分)	(4) 自分のストレス対処法（コーピング）について、振り返らせる。 ・ よい結果をもたらすコーピングと悪い結果をもたらすコーピングに分けて振り返らせる。 【よい結果をもたらすコーピングの例】 ・ 友だちとテレビ番組の話をする。 ・ 趣味のピアノを弾く。 【悪い結果をもたらすコーピングの例】 ・ 教室の壁を蹴って壊す。 ・ 母親に八つ当たりして悲しませる。
(10分)	(5) それぞれのストレッサーとコーピング法についてグループで話し合わせる。 (6) 話し合ったことを、発表させる。

(13分)	(7) 次のようなストレス対処法の類型を示しながら説明し、自分たちの対処法がどれに当たるか考えさせ、ワークシートに整理してまとめさせる。 ア「自己主張すること」 【例】嫌なものは、「嫌です」と言葉に出して断ってみる。 イ「相談相手をもつこと」 【例】友だちに愚痴を言ってみる。 ウ「逃げてみる、避けてみること」 【例】先生に理由を話して、自分にできそうな係にしてもらう。 エ「考え方を変えてみること」 (ア)「本当にそうあるべきなのか」 【例】「人間は失敗してはいけない」人間だから失敗するのがあたり前と考えるとどうか。 (イ)「前向きな考え方はできないか」 【例】「学校が遠いのは不利なこと」毎日歩くので、体も心も鍛えられると考えるとどうか。 (ウ)「心の中で自分自身に嫌な言葉をかけていないか」 【例】「何をやっても私はだめだな。」失敗も貴重な経験であり、経験を積んでいるとは考えられないか。 オ「気分を落ち着かせる」 【例】水を飲んで深呼吸をしてみる。 カ「体の興奮をしずめる」 【例】スポーツで汗を流してみる。
展開	(8) 教師がエピソードを交えてまとめる。 ・自分の中学校時代の経験談を話す。 ・ストレスのまったくない世界の虚しさに注目させる。 ・ストレスも生きる力につながることを伝える。
(5分)	(9) グループで本時の学習について振り返らせる。 (10) 個人の振り返りを行いワークシートにまとめさせる。 (11) 次時の予告をする。
終末 (5分)	

(参考 大野太郎編「ストレスマネジメント・ワークブック」)

このほか、開発的カウンセリングの積極的な実践及び定期教育相談をはじめとする相談体制の整備と充実が未然防止には重要である。

また、全職員の協力体制や家庭、地域、関係機関などとの連携による情報の共有及び問題行動への具体的対応に関する研修の充実が求められる。

3 問題行動の発生に対する具体的対応

問題行動が発生した場合は、家庭や関係機関などと連携しながら、迅速かつ適切な指導と事後の対応に当たる必要がある。

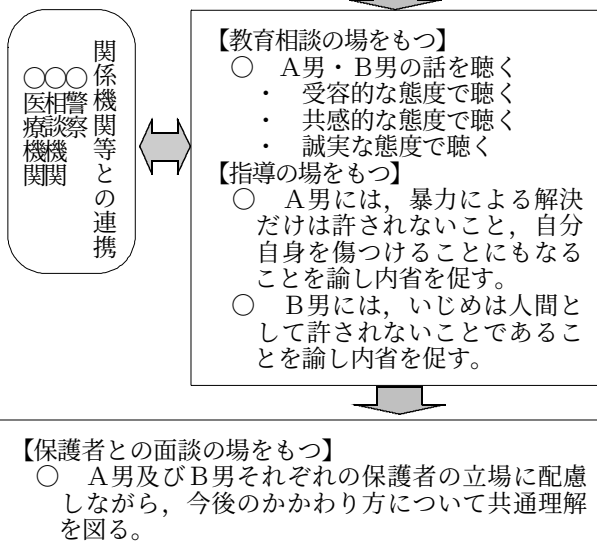
ここでは、問題行動が発生した場合の対応について、組織的・継続的な対応のポイントを事例を通して示す。

【事例】 中学校1年生のA男は、クラスでもあまり目立たないタイプの生徒だった。A男は、〇〇小学校から入学してきたが、〇〇小学校出身の生徒はクラスに2人と少なく、友達もいない状況だった。クラスのB男から毎日のように言葉によるいじめを受けていたが、言い返すこともできず、我慢に我慢を重ねていた。

ある日、A男は、学級担任の授業終了直後、突然こぶしをふりあげ、大声をあげながらB男に殴りかかり、けがをさせてしまった。

校内支援体制による対応

- 【A男・B男の間に入り、制止する】(学級担任)
- 【同僚・管理職への連絡】(学級担任・副担任)
- 【校内支援体制による迅速な対応】
- ・ A男のケアには、学級担任が対応
 - ・ B男のケアには、養護教諭が対応(病院へ搬送)
 - ・ クラスの生徒のケアには、副担任が対応
 - ・ A男の保護者には、学年主任が対応
 - ・ B男の保護者には、教頭が対応(病院へ行き、B男の診断結果を確認し、校長に連絡する)



きめ細かな対応の継続

4 家庭との連携

子どもたちのストレスや心の状態は、学校だけでなく、家庭での保護者等のかかわりが、大きな影響を与えている場合も少なくない。

次に紹介するのは、子どもたちの心に対してマイナスの効果をもたらすかかわり（ディスカウント）のチェックリストと、それにプラスの効果をもたらすかかわり（ストローク）を加えた具体例である。このような題材を用意し、PTAの会合等でロールプレイング（役割演技）等による啓発を行い、連携を図ることが必要である。

(1) ディスカウントのチェックリスト

項 目	チェック
① 理屈で押さえつけている ・ 大人もしくは保護者の立場からの正論で、子どもを責める。	
② ないがしろにしている ・ 子どもを日常的にマイナス評価し、期待されていないという気持ちにさせる。	
③ じゃま者扱いしている ・ 子どもが自分にとっての悩みの種、不安材料であることを口にする。	
④ 決めつけている ・ 子どもの意欲を否定し、先入観で悪く決めつけてしまう。	
⑤ 鼻で笑う ・ 子どもの努力をからかう。	
⑥ 萎縮させる ・ 子どもの努力を否定し、意欲を萎えさせる。	
⑦ ほかの物差しで測る ・ 他と比較し、素直に評価しようとしなない。	
⑧ 攻撃する ・ 子どもが深く傷つくことを平気で口にする。	
⑨ 叱る対象を広げる ・ 過去にさかのぼって叱るなど叱る内容を追加してしまう。	

※ 該当する項目があればチェック欄に○印を記入する。

(2) ストロークを取り入れた具体例

【例1】決めつけるディスカウント

何事も口だけで行動が伴わない子に

【ディスカウントの例】

「どうせあんたは口だけだから！そんなことできっこないでしょ！」

【ストロークの例】

「すごくいいことだわ。やる気満々ね。さすがは〇〇、精一杯やるのよ。母さんも応援するね。」

【例2】ほかの物差しで測るディスカウント

前のテストよりよい点をとってきた子に

【ディスカウントの例】

「前よりいいけど平均より低いんじゃない？平均点は何点だったの？」

【ストロークの例】

「よかったじゃない。がんばった甲斐があったね。母さんも自分のことのようにうれしいわ。」

（引用・参考 國分康孝1996「エンカウンターで学級が変わる中学校編Part 1」）

「いきなり型」の問題行動への対応については、その未然防止を図ることが最も重要である。学校生活や家庭生活、地域における子どもたちの状況を見守りながら、家庭、地域と協力体制を取り、組織的かつ積極的に対応を進めることが望まれる。

【引用・参考文献】

- ・ 文部科学省『新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム（中間まとめ）』平成17年9月
- ・ 警察庁生活安全局少年課 科学警察研究所防犯少年部『最近の少年による特異・凶悪事件の前兆等に関する緊急調査報告書』平成12年12月
- ・ 文部科学省『児童生徒の心の健康と生活習慣に関する調査報告書』平成14年
- ・ 國分康孝『エンカウンターで学級が変わる中学校編Part 1』1996図書文化
- ・ 大野太郎編『ストレスマネジメント・ワークブック』2002東山書房

（教育相談課）